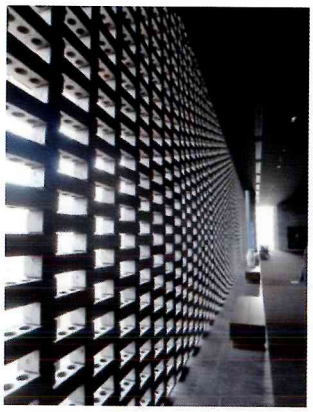
小見山信巳
建築家
株式会社　久米設計　設計本部
日本建築美術工芸協会法人会員

澄みきった秋晴れの11月、大阪から視察会は始まった。日建設計江副さんの案内で大阪弁護士会館を観る。細身で洗練されたビルのロビーに足を踏み入れると、炻器質のレンガがもたらす重厚さと、一段置きに空隙が出来るように積まれたレンガスクリーンから差し込む光のコントラストが、品位ある清浄な空間を創り出している。素材感を際立たせるためにシンプルさにこだわったディテールが工芸品を思わせる建築であった。



大阪弁護士大会館ロビー

甲子園会館の陰影のあるタイル

甲子園会館は1930年に甲子園ホテルとして建てられた。フランク・ロイド・ライトのもとで旧帝国ホテルの設計にも携わった遠藤新の名建築である。武庫川女子大は、この甲子園会館と新築した建築スタジオで建築教育を行っている。優れた建築空間を実感しながら学ぶ環境は学生にとってうらやましい限りだ。建築スタジオは深い水平の庇やボーダータイルでその調和を図りPca柱や床版などシステマティックな建築とともに開放的な空間となっていた。日建設計岡田さんは、「生きた教材」としての建築を目指したという。細かな陰影のある甲子園会館と水平の陰影をもつ建築スタジオ、どちらの建築も光を意識させるものとなった。

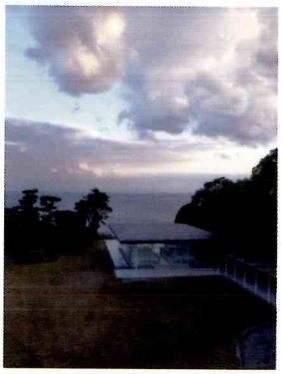
武庫川女子大
建築スタジオ

竹中道具館は建築、展示どちらも技術の粋を尽くして生まれた建築だった。モダンな建築のなかに伝統の職人技が散りばめられており、いつまでも観ていたいと思った。設計した竹中工務店須賀さんからは存在感を消した構造と無垢材を使った伝統の船底天井にそのこだわりを伺い、木が織りなす陰影に温かさを感じた。

竹中道具館
ロビーの船底天井

次の日も晴天に恵まれ、建築家の手嶋保さんの案内のもと、「伊部の家」を観た。備前焼の工房と一体となったシンプルな構成の住宅には、素朴な素材と緻密なディテールそして東西からの間接光に包まれた、豊かで静寂な空間に心が洗われた。

ジェームズ邸は有形文化財に指定されることによる、保存とリノベーションの幸せな事例である。竹中工務店中村さんの説明にあった近代建築との調和と、その活用による存続の在り方に感銘した。



ジェームズ邸　チャペル

閑谷学校　野石積の土留

閑谷学校は建築家竹原義二さんの案内で、建築を読み解くその接し方に共感した。学校のおかれたその環境に視線をおき、治水のための土留の素晴らしさは環境とともに生きる建築とはどうあるべきかを教えられた。土留の高さと建築の視線の交わりなど、一見自然に見えるその設えには、計算された空間への本質がある。竹原さんは時に、雨の日にこの山奥の閑谷を訪れるという。雨の流れも建築の一部になると・・・私も一度訪ねたくなった。

今回の旅は秋の日差しのなかでどの建築も光に浮かび上がるような感じがあった。また、設計を行った建築家に直接、そのコンセプトを聞くことで、より深く建築に接することができたことに深く感謝している。